

庄田慎矢¹: 報告—第1回日韓共同標本採集会～考古学専攻者の視点から～Shinya Shoda¹: Report—The first Japan-Korea collaborative wood collection trip in South Korea

私は植物について大した知識もなく、考古学の中で特に自然科学分野と関わる部分について研究してきたわけでもない。むしろそういった門外漢的な視点から、2006年8月30日～9月4日に行われた韓国慶尚南道・知異山での採集会に参加した感想を書くことになった。まず、この採集会に参加するまでの経緯から話を始めたい。

私は韓国に住む日本人留学生だが、ひょんなことからこの地で低湿地遺跡の発掘調査に携わる機会を得た。その遺跡というのは、忠清南道牙山市に所在する葛梅里遺跡で、時期的には紀元後3～4世紀。以前から本で読んだり人が掘っている現場を見たりして、なんとなく「低湿地は大変だなあ、泥沼だなあ」などと人ごとのように思っていたが、いざ自分が掘るとなると大変だ。遺物の量は膨大であるし、有機物を空気にさらす時間を極力抑えるという、時間との戦いを常に強いられる。目の前に現れた鮮やかな色がみるみるうちに黒くなってしまふのはなんともいたたまれないが、それだけに発見者だけが目撃できるというおかしな喜びを感じることもある。

低湿地遺跡には、それ以外の遺跡では決して残らない自然遺物 organic remain が豊富に残されている。それだけに、Wetland Archaeology なる用語があるように特殊な分野として認識されることもある。無数に残されたこれらの自然

遺物をどう選択・採取し、何を明らかにするのかは、すべて調査者の力量に委ねられる。この遺跡からは大量の流木や木製品が出土したのであるが、これが厄介者である。放置するとすぐに変形するので水漬けにしておくのだが、これが大変にかさばる。コンテナはすぐに満杯になるし、大型のものだと運搬にも専用ケースが必要になる。こういった面倒くささとは裏腹に、木器の表面に残された、光に照らされて浮き上がる鋭利な加工の痕は、えもいわれぬ興奮を呼びもする。木製品の大部分は何に使ったのか、何を作ろうとしたのかもさっぱり分からない。そもそも木が分からない。そんな我々を能城修一氏が助けてくれることになった。カミソリで手早くプレパラートを作り、顕微鏡をのぞきながら瞬間的に同定を進めていく。職人技である。しかし問題は、これは何の木ですよと教えてもらっても自分がその木を知らないという致命的な点だ。これではまともな考察はできない。結局氏に誘われて、全北大学校の先生方の快諾もあり、採集会に参加させて頂くことになった。我ら「環境」をうたう研究所、巧い具合に全日程に参加できるよう出張許可が下り、関心のある学生2人を連れて智異山へと向かった。

参加者21人中5名が考古学専攻者。考古学の世界でも60年代後半以降環境への関心が高まり、「環境考古学」な



図1 知異山採集会での作業風景。



図2 コナラを伐倒した後に果実標本を採集している。

る分野が形成されて現在に至っているのは周知の事実だが、自然科学者と考古学者（こういつたくくり方に疑問を持たれる方もいるとは思いますが）が学問的な相互理解のもとで研究を進める雰囲気広がってきたのは、少なくとも日本や韓国ではごく最近のことのように思われる。

なにはともあれ考古学専攻者ももう少し自然科学について関心をもって勉強しなければならないということで、格好の機会を得た形になった。実際植物を研究している人々がどういふふうで資料と接しているのかを生で見、真似してみることができるのである。なるほど、モノを良く見る、モノにこだわる、モノから出発する、というところは考古学にも通じる。どの木がどんな実や葉をつけてどんな格好をしているのか、そういうことも確かに大事なのだが、私にとっては植物を資料化する過程を見られたのが最大の収穫であったかと思う。もちろん、採集という行為自体は全体の行程の中のごくわずかにすぎないのであるが。

もう一つの収穫は、植物は色々な部位から構成されているということを改めて理解できたことである。遺跡から出てくる植物遺存体はいつもバラバラにされており、つい個別的に解釈したがる傾向を招く。しかし結局は木材も種実も花粉も同じ植物を構成する、相互に密接に関連した要素である。樹種同定、種実同定、花粉分析と様々な分析が行われるが、これらを総合化し遺跡に対する理解へと昇華させるためには、もとは一つの植物であるという認識が大事なのである。当たり前のことであるが、それが私には印

象深く思われた。

ところで、この採集会は初めて行われる日韓合同の採集会であったという。日本人10名と韓国人11名という比率に加え、韓国に留学している日本人や日本に留学している韓国人も参加し、まさに日韓合同という名にふさわしい構成となった。5名の日韓バイリンガルの存在が、隊の中の言語の障壁を相当部分取り除いたように思う。智異山の名物であるツルニンジンのマッコリを飲みながら会話にもまさに花が咲き、作業も全体的に順調に進んでいた印象を受けた。

韓国には「시작이 반이다」という諺がある。直訳すれば「始まりが半分だ」。要するに始めることが最も難しいことであり、始めてしまえばもう半分は達成されたようなものというのだ。そんなに甘いものではないかもしれないが、少なくとも始まりがうまく行ったことは、今後の展望にも明るい見通しを与えてくれるものなのである。

最後に、私たちがこの採集会に参加できるように便宜をはかって下さった李弘鍾・能城修一・李在東の各先生に深く感謝いたします。

(¹ 〒339-700 大韓民国忠南燕岐郡鳥致院邑瑞倉洞 208 韓国考古環境研究所。現住所：〒277-8563 千葉県柏市柏の葉 5-1-5 東京大学柏の葉キャンパス)